

馮寄台・元台北駐日經濟文化代表処代表 インタビュー

国立台湾大学歴史学研究所博士課程 寺山 学
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

今回は、馬英九政権下で駐日代表を務め、2024年総統選挙に国民党から出馬した侯友宜氏の訪日アドバイザーを担った馮寄台元駐日代表から、駐日代表時代の逸話、国民党と日本との関係及び兩岸関係の現状などについて話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2024年3月20日
- ・インタビュー実施場所 中国信託商業銀行本社

<馮寄台元駐日代表略歴>

1946年、高雄市生まれ。

1955年、外交官であった父親が中華民国駐日大使館に着任したことに伴い訪日。東京都港区立筭小学校に転入学。

1959年、筭小学校卒業。同年、東京都港区立高陵中学校に入学、後に父親の転勤により帰台。建国中学卒業後、ポリビアにて高校を卒業。

1971年、メイビル州立大学数学科卒業。その後、ノースダコタ州立大学大学院にて国際関係学修士課程修了。

1974年、外交部に就職。同部北米司、駐米大使館などでの勤務を経て、1984年、外交部北米協調会行政組長に就任。その後、1987年、ハーバード大学大学院にて公共行政学修士課程修了。

1989年、中国広播公司海外部主任に就任。その後、中央社編集局長、国民党青年工作会副主任などをを経て、1997年には外交部礼賓司長に就任。

2003年、駐ドミニカ共和国特命全権大使に就任。

2007年、馬英九選挙対策本部国際事務主任に就任。

2008年、台北駐日經濟文化代表処代表に就任（2012年離任）。

2013年、中国信託国際事務最高顧問就任。そのほか、現在では、台日商務交流協進会理事長、ICRT (International Community Radio Taipei) 董事長、中信金融管理学院董事長などを務める。2018年には日台関係への功績により、旭日重光章を受章。



日本との関わりについて

——知日派として知られている馮寄台元代表ですが、日本との最初の関わりはいつでしたか。また、外交官人生における日本との関わりについては如何でしたか。

馮元代表 私の父も外交官であり、1955年から5年ほど中華民国駐日大使館で勤務しました。同期間、家族で日本に滞在したことが、私と日本との最初の関わりです。当時通った小学校は、東京都港区立筭小学校でした。終戦後まだ10年余りしか経っていなかったことから、当時の日本はまだ貧しかったことを記憶しています。そのような中で、最も印象深く覚えていることは、父が日本の電機メーカーを視察した際に持ち帰って来たポータブルラジオです。当時世界でも非常に珍しかったポータブルラジオを手にしたときの大変な興奮を今でもよく覚えています。

幼少期の日本での生活体験とは対照的に、外交部に入った後、日本に直接携わる機会は、駐日代表として訪日する2008年まで恵まれませんでした。この駐日代表への就任にも紆余曲折がありました。当時、馬英九總統からは、駐日代表への就任の打診を何度も頂きましたが、私自身が南京籍の外省人であること、及び私の母が80歳を超える高齢であったことから、馬總統からの要請に対し、お断りし続けました。ところが、馬總統は決して諦めることなく、私の母を訪ねました。その際、馬總統は私の母に向かって、「是非とも私の信頼できる友人である息子さんに日本に行って頂きたい」と伝えましたが、この言葉を耳にし、私は心を動かされ、馬總統からの要請を受けることを決意しました。馬總統自ら私に対して何度も説得した事実は、駐日代表に就任した後、有利な効果を生みました。日本側が馮寄台の発言の背後には、馬總統の意向が強く反映されていると見たのです。

また、幼少期の日本での体験は、駐日代表としての業務にも大きなプラスの効果がありました。例えば、日本側の関係者と面会した際には、冗談めかして「私の日本語は幼少期に学んだ小学生レ

ベルであるため、もし失礼があったらお許しく下さい」と発言し、相手との距離を一気に縮めることができたのです。

駐日代表時代の逸話、日台関係に対する見方

——駐日代表として勤務する中で、特に印象に残っている出来事や日台関係について感じたことはありますか。

馮元代表 駐日代表に着任後、私がまず行ったことは、代表処の館員を呼んでこれまで解決できなかった日台の間に横たわる懸案について聞き出すことでした。その中で館員から挙げたのは、ワーキングホリデー、「故宮博物院展」の日本での開催、日台民間投資取決め、オープンスカイなどであり、これらを推進することが私の任期中の重要な目標となりました。

一方で、私が任期中に携わった事柄の中で最も印象深く、またその後の日台関係において最も重要であると考えるのは、2012年7月に改正出入国管理法が施行され、在留台湾人の「在留カード」上の表記が、それまでの「中国」から「台湾」へと変わったことです。前述のオープンスカイや投資取決めなどは、現在の日台関係にとって大変意義深いものですが、一般の台湾人が身を以て実感できるという意味において、「在留カード」上の表記変更ほどインパクトが大きい事柄は無いと思います。蔣経国元總統が後年「私は台湾人であり、中国人でもある」と強調したように、その出自に拘らず、「台湾」は台湾人にとって感情的に重要なアイデンティティなのです。

表記の変更が実現した際には、一貫して国民党に批判的であった台湾独立派の在留台湾人の方からも、「何十年も実現できなかった悲願が実現した。馮寄台は最大の功績を残した代表だ。」とお褒めの言葉まで頂きました。ただ、実際には、私の功績などでは決してなく、これは馬政権発足後、兩岸関係が大きく改善したことによる結果であると考えています。すなわち、兩岸関係が改善したことで、日中関係上、台湾に関する事柄がそれほど問題視されなくなり、日本側にとって懸案とさ

れた様々な事項が推進し易くなったことが背景にあるのだと見ています。このことは、「在留カード」の問題に限らず、前述のオープンスカイや投資取決めなど、馬政権下で日台関係が進展した大きな要因だと思います。この意味で、私は日台関係にとって、兩岸関係は最大の変数であり、兩岸関係の改善なくして、本質的な日台関係の発展は難しいと考えます。こうした状況は、現在の日台関係においても基本的に変わっていないと思います。

——馮元代表は在任中、積極的に文化交流を推進されました。特に印象に残っていることは何ですか。

馮元代表 最も印象に残っているのは、2013年に行われた台湾における宝塚歌劇団の初公演です。当時、日台の地方都市間の文化交流は進んでいましたが、双方を代表するような大型の文化交流はまだ不十分であると感じていました。そこで「故宮博物院展」の日本での開催を準備するとともに、日本からも国宝級の文化コンテンツの台湾での交流を推進できないかと考えました。その際に思い浮かんだのが宝塚歌劇団でした。すぐに兵庫県に赴いて宝塚側に話をもち掛けましたが、ネックとなったのは公演の興行収入だけでは赤字になってしまう点でした。そこで、台湾の企業関係者に支援を求めたところ、幸いなことに中国信託の辜濂松氏、エバーグリーン・グループの張榮發氏やマクロニクス・インターナショナル(旺宏電子)の呉敏求氏をはじめ、多数の支援を得ることができ、2013年4月に台湾での初公演に至ることができました。また、この過程では、日華議員懇談会や夫人が宝塚歌劇団出身であった鳩山由紀夫元総理をはじめ、日本の国会議員の方々から多大な支援を頂きました。

東日本大震災と日台関係

——東日本大震災発生時に駐日代表を務めておりましたが、震災発生後の日台関係については、どう見えていますか。

馮元代表 東日本大震災の前後では、日台関係は質的に全く異なる関係になったと感じます。言う

までも無く、震災発生後、日本を積極的に支援したのは、一般の台湾人ひとりひとりです。日本を支援したいと思う台湾人の気持ちは非常に強いものがあり、震災直後、一部の台湾人は自ら義捐金を持って外交部の窓口へ押しかけ、「これを日本に届けて欲しい」と相談に来るほどでした。

日本を支援したいという気持ちは、馬英九総統も同じでした。当時、馬総統は、夫人とともに自ら率先して東日本大震災のチャリティー番組に出演し、台湾各地からの義捐金の受付に対応してみせました。そのほか、民間では慈濟基金会による支援など、あまり公になっていないものも含め、本当に無数の台湾人が様々な形で日本を支援しました。

当時日本にいた私は、義捐金や救援隊のほかに、協力できることはないかと考え、日本側に必要な物資について問い合わせたところ、被災地では電気がなくて困っているとの話を耳にしました。すぐに楊進添外交部長(当時)に相談したところ、楊部長は、台湾中から可搬型発電機を集めて、早急に日本に輸送してくれました。こうしたことは、これまであまり対外的に発信してきませんでした。当時楊部長に積極的に動いて頂いたことは、今でも心から感謝しています。また、こうした台湾からの真心のこもった支援は、日本人の心に届いたことと思います。

実際、台湾からの支援について、私は様々な場面で日本の方から感謝されました。例えば、個人のレベルでは、震災後のある日、行きつけの理髪店に行った時のことですが、その理髪店の店員に私の身分について明かしたことはありませんでしたが、その日は店員が全員、散髪中であつた私の後方に集まり、鏡越しに深々と頭を下げながら、「台湾の皆様にご支援頂きありがとうございます。」とお礼を言われました。また、政治レベルでは、震災後、自民党青年局と交流を行った際、親交の深かった古川禎久青年局長(当時)との間で、友情の印として、その時お互いが身に付けていたネクタイを交換することがありました。その後、2011年9月、古川局長が衆議院本会議の代表質問において、「台湾からの支援に対して、日本国として礼を尽くし、心から謝意を伝えるべきではないか。」との旨の発言をされましたが、そ

の際に古川局長が身に着けていたのは、交換した私のネクタイでした。当時、その国会中継を見て、大変な感動を覚えたことを記憶しています。

私が震災後の日台関係にとって最も重要だと考えるのは、日本人に対する台湾人の気持ちが日本人を感動させ、1972年の断交後招待されたことがなかった赤坂御苑での園遊会に駐日代表として初めて招待され、天皇陛下から直接、台湾の支援に感謝の言葉が述べられたことです。なお、翌日の産経新聞の朝刊では一面トップで天皇陛下が私と話した写真が掲載されました。北京からの激しい抗議を懸念しましたが、兩岸関係が緩和する中で、そうした抗議はなかったように聞いています。

国民党総統候補の訪日

——話は変わりますが、今回の総統選挙に際し、馮元代表がアドバイザーを務める形で実現した侯友宜氏による訪日は、国民党の総統候補として16年ぶりの訪日でした。

馮元代表 これまで国民党の総統候補者はいずれも日本との関係を重視してきましたが、様々な事情から、今回の侯友宜氏の訪日は馬元総統が行った2007年以来の訪日となりました。前回の2020年総統選挙においても、総統候補であった韓国瑜氏は訪日を希望し、同氏の訪日のため、私が先遣隊として訪日し、日本側の関係各所との意思疎通を進めましたが、残念なことに、その後日程上の理由などにより訪日を実現しませんでした。

——馮元代表は、2007年の馬元総統の訪日の際してもアドバイザーとして携われました。馬元総統と侯友宜氏の二回の訪日に参画して、如何なる変化を感じましたか。

馮元代表 率直に申し上げて、この二回の訪日を比べると、今回の侯友宜氏の方が日本側により温かく迎えて頂いたように感じます。実際、馬元総統が2007年に訪日した際には、特に国会議員との交流において、日本側が馬元総統に抱く警戒心を強く感じました。また、当時は訪問した先々で、民間団体による抗議活動にも遭遇し、中には馬の

帽子を被って馬元総統を罵倒するような人までいました。この点、今回の訪日では当時とは状況が全く異なっていました。抗議活動を行うような人はいませんでしたし、麻生太郎自民党副総裁をはじめ、国会議員や関係者との交流において、日本側には非常に友好的に接して頂きました。

国民党と日本との関係

——現在の国民党と日本との関係については、どう見えますか。

馮元代表 2016年の民進党政権発足後に行われた国民党の党資産処理などの措置により、国民党では党職員の給料の支給すら問題になるほど、深刻な資金不足に直面しています。そうした状況の中で、非常に大きな影響を受けているのが党の対外関係であり、党として専門の人材を育成することができない状況が続いています。米国については、2022年になってようやくワシントンDCに国民党の駐米事務所を再開させるに至りましたが、日本との関係では、党として人材が育てられなかったのと同時に、過去8年間にわたり国民党が立法院の少数政党であったことから、議員間交流もあまり積極的に推進することができなかったように感じます。リソースも無ければ権力も無いという状況の中で、国民党と日本との関係が自ずと疎遠になってしまった側面はあると思います。

今回、侯友宜氏が訪日するにあたり、既に10年以上も第一線から退いている私に声がかかったのも、そうした党内の深刻な人材不足が影響しています。本来であれば、私が出る幕など無く、党内に多くの日本担当の人材が揃っていたはずですが。

国民党内の事情とともに、日本側においても国民党に対する関心が低下しているように感じます。政権与党ではないため仕方ない部分はあるかとは思いますが、将来国民党が再び政権を取る可能性は十分にあることから、是非、日本側には国民党内の事情もご理解いただき、国民党との関係構築にも積極的に取り組んで頂ければ嬉しく感じます。

総統選挙における中国の介入について

——内外の一部メディアなどでは、総統選挙において中国が様々な形で介入を行ったと見る向きもあり、中には国民党を裏で支援したのではと疑問視する見方すらありますが、こうした見方についてはどう考えますか。

馮元代表 まず、私自身の経験談を申し上げれば、昨年12月、夏立言・国民党副主席が台商（台湾人ビジネスパーソン）との会合のため、中国を訪問した際、私も西安には行ったことが無かったため、個人の立場で同訪問に同行しました。当時、西安、上海、杭州及び東莞などを訪れ、各地の台湾人ビジネスパーソンと面会しましたが、私自身、この過程で中国側が何らかの形で台湾への選挙介入を目論むような行動を目にしたたり、耳にしたことは一度もありません。中国に滞在する台湾人ビジネスパーソンの中で、ある程度、国民党支持の傾向が存在することは事実であるかと思いますが、それは単に現在の兩岸関係において、現政権が台湾人ビジネスパーソンの力になれていないことが最大の原因です。また、夏副主席が訪中した際、一部から「台湾を売りに行った」との批判の声が上がりましたが、夏副主席自身が「自分には釈迦頭（2021年に中国側が禁輸措置を行った果物で「アテモヤ」と称される）を売ることはできても、台湾を売ることなどできない」と言及したとおり、リソースも無く権力も無い国民党が「台湾を売る」などとはあまりにも荒唐無稽であると感じます。国民党は台湾人ビジネスパーソンの抱えている問題を聞き、それを関係者に伝達する役割でしかなく、民間団体による意思疎通という枠組みを超えることはありません。

また、中国による有り得る介入として、ネットを通じた選挙介入について度々取り沙汰されますが、ご周知のとおり、今回の選挙においてネット上で常に話題となったのは、国民党の侯友宜氏ではなく、台湾民衆党の柯文哲氏です。その意味で、中国側がネットを通じて裏で国民党候補を支持したという見立ては成り立ちません。世界的な反中の動きから、中国に関する報道では、一部理性を

失っている側面があるように感じます。メディアには、国民党を単純に「親中」とラベリングをするのではなく、より正確に国民党の立場や実情について認識して欲しいと思います。

中国経済に対する見方及び台湾への影響

——中国経済の現状についてはどう見えていますか。また、中国経済の動向が台湾に与える影響についてはどう捉えますか。

馮元代表 今回の訪中では、いくつかの地方都市を視察しましたが、訪問した都市の中心部はいずれも非常に栄えていました。実際、一部で伝えられているのとは異なり、西安の観光地などは人でごった返していました。その一方で、どの都市も高速鉄道に乗って少し郊外に出ると全く違う風景が広がっていました。そこでは誰も住んでいない未完成の空マンションが大量に放置されており、経済については素人ながらも、中国経済が何らかの問題を抱えていることについては実感できました。

台湾の一部には対岸の火事の如く、中国の経済の失速を見て喜ぶような人もいますが、よく考えなければならないのは、中国経済が大きな問題に直面した場合、最も被害を受けるのは他でもない台湾である点です。専制国家が内部で問題を抱えた場合の常套手段は、周囲を攻撃し、批判の矛先を外部に移すことです。万が一、中国が深刻な経済危機に見舞われた場合、中国共産党に対する支持の回復のため、台湾攻撃の動きを起す動機が生じかねません。そのため、台湾人は、中国経済の失速によって、最大のダメージを受けるのは自分たちであるということを自覚しなければならないのです。この点において、米国と台湾では置かれた立場が全く異なります。台湾としては、何としてでも兩岸関係の平和を維持し、戦争を避けなければなりません。

最後に

——馮元代表は、日台関係への御貢献により、2018年に旭日重光章を受章されました。

馮元代表 大変名誉なことに、2018年、日本台

湾交流協会台北事務所の沼田幹夫代表（当時）から、私の在任中の日台関係への貢献に対し、日本政府から私に「旭日重光章」を授与するとの連絡を頂きました。私は妻とともに訪日し、皇居で天皇陛下（現在の上天皇陛下）から勲章を授与されました。実は、私は1950年代の日本に滞在していた小学生時代に、明仁皇太子がテニスをされるの

を金網越しに拝見したことがありました。その時から園遊会に出席し、さらに皇居で勲章を授与されるまで、私と日本の縁は驚きと栄誉に満ちていました。この60年間は、私にとって幼い頃の思い出から日本で勤務した外交官生涯の最高峰まで、日本と深い縁で結ばれた60年でした。



取材中の一コマ